

Title	長州藩尊攘派の形成及び抬頭に関する一考察
Sub Title	Formation and rise of the Sonjo-ha (尊攘派) in the Choshu Clan (長州藩)
Author	西澤, 直子(Nishizawa, Naoko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1988
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.57, No.4 (1988. 3) ,p.147(659)- 163(675)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19880300-0147">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19880300-0147</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 長州藩尊攘派の形成及び抬頭に関する一考察

西 澤 直 子

本稿は、文久期以後長州藩に、藩政の政治的主体として登場した尊攘派の形成と、その尊攘派がいかにして政治権力を得たかについて、既存の藩内政治体制との関わりから考察し、その性格を明らかにしようと試みるものである。

## I 尊攘派の形成

### (1) “尊攘派手子衆”の存在

長州藩は文久二年（一八六二）七月六日の御前会議<sup>(1)</sup>において藩是転換を決定し、それ以後尊攘路線を取ることになる。そこでこの御前会議について若干の考察を加えることから始めたい。

この会議の出席者は、前当職（国家老）浦鞆負の日記から表1に示したような人々であった。

長州藩尊攘派の形成及び抬頭に関する一考察

会議が、当役や加判役といった藩内で「当役衆」「当役中」などと呼ばれる家老クラスの人々と、「手子衆」「手子中」などと呼ばれる手元役・用所役・祐筆といった実務官僚によって構成されていたことがわかる。しかしその中には、後に長州藩尊攘行動の急先鋒を成していくような、松下村塾出身者を中心とするいわゆる「尊攘志士」達の名前は、ほとんど見出すことができない。そして、この会議の内容をみれば、現在のところ『長井雅楽詳伝』による間接的な史料しかないが、そこから井上勝生氏は会議の主導権が「『手子中』と呼ばれる実務役人に存在した<sup>(4)</sup>」としている。一次史料を示すことはできないが、実務官僚である「手子衆」を中心に議論が開いたとするのは妥当であろう。とするならば、この会議で藩の尊攘路線が決定したのは事実であるから、会議

表1 文久元年3月(藩是決定)～2年7月(転換)に藩要路に就任した者  
及び御前会議出席者

当役衆(中)	国 許			江 戸		※2		
	当 職	福 原 越 後		当 役	益 田 弾 正	加 判 役	毛 利 伊 勢	
				江戸留守居	井 原 豊 前	〃	毛 利 将 監	●
						〃	毛 利 筑 前	●
						前 当 職	浦 鞆 負	●
手 子 衆 (中)	裏判役	李 家 帶 刀		用 談 役	井 上 小 豊 後	●		
	手 元 役	北 條 瀬 兵 衛	●	手 元 役	周 布 政 之 助	●	直 目 付	梨 羽 直 衛
	〃	福 原 与 三 兵 衛		用 所 役	来 島 又 兵 衛		〃	長 井 雅 楽
	祐 筆	渡 辺 伊 兵 衛		〃	竹 内 正 兵 衛	●	〃	内 藤 万 里 助
	蔵元兩人役	中 村 文 右 衛 門		〃	周 布 政 之 助		〃	林 主 税
	〃	山 縣 吉 之 助	△	〃	山 縣 吉 之 助	●	〃	毛 利 登 人
	〃	福 原 与 三 兵 衛		〃	小 川 市 右 衛 門	●	京都御用掛	
	〃	内 藤 次 郎 兵 衛		〃	柿 並 市 太			山 田 亦 介
	〃	松 原 太 郎 右 衛 門		〃	内 藤 次 郎 兵 衛			桂 小 五 郎
	〃	八 谷 藤 兵 衛		祐 筆	兼 重 讓 蔵	●	〃	来 原 良 蔵
	〃	波 多 野 正 兵 衛		〃	中 村 九 郎 兵 衛	●		
	所 帶 方	来 島 又 兵 衛		〃	山 田 宇 右 衛 門	●	備場用談役	桂 与 一 右 衛 門
	〃	竹 内 正 兵 衛	△	公 儀 人	三 井 善 右 衛 門			林 木 工
	〃	柿 並 市 太		〃	小 幡 彦 七			
	遠 近 方	松 原 太 郎 右 衛 門		〃	大 和 弥 八 郎		大坂留守居	宍 戸 九 郎 兵 衛
	〃	林 内 蔵 太		〃	井 上 □			児 玉 準
	〃	田 北 太 中		江戸留守居手元役	宍 戸 九 郎 兵 衛		大坂頭人	宍 戸 九 郎 兵 衛
	〃	佐 々 木 八 郎 兵 衛						
	〃	山 田 宇 右 衛 門		矢 倉 方	内 藤 次 郎 兵 衛			
	〃	中 嶋 市 郎 兵 衛		〃	宍 戸 九 郎 兵 衛			
	〃	引 田 新 左 衛 門		〃	小 川 市 右 衛 門			
	町 奉 行	出 羽 源 八						
	郡 奉 行	北 條 瀬 兵 衛	△					
	〃	前 田 孫 右 衛 門						

山口県文書館蔵「要路一覧」「浦日記」より作成

※1. 名前の後に●の付してある者が、文久2年7月6日御前会議出席者。(当時の役職の欄に印。△は兼役)

※2. 国許(国相府)・江戸(行相府・江戸留守居)のいずれにも属さない役職。

に参加し主導権を握った「手子衆」と、尊攘行動の急先鋒となる「尊攘志士」達との関わりを考察すれば、そこから政治的主体としての尊攘派の形成が明らかになるといえよう。

文久元年（一八六一）三月、航海遠略策が藩是となり公武間周旋が決定すると、それに対し久坂玄瑞らはさかんに反対運動を行うが、この問題を通して、ある点で彼らに共鳴し彼らと繋がりを持っている「手子衆」の存在をみることが出来る。

長井が幕府への周旋の為江戸へ赴いた時、久坂玄瑞・久保清太郎らは文武修業の目的でちょうど江戸に派遣されていたが、「御国にて俗論相起り、幕府へ左祖被遊、攘夷之説を破り候次第にて、以之外御家之恥辱と申事を申遣候者有之候由にて、衆口騒々敷、諸生一両輩途中へ出迎、私参府を支へ、承引不仕候ハ、差違可申坏、種々動揺仕候<sup>(5)</sup>」という状況であった。そしてその後彼らは江戸あるいは京都で、活発な弾劾運動を展開していくのだが、それに対し、国許を中心に「当役衆」「手子衆」の中から次のような意見が起こってくる。

「…幕府之嫌疑え相触候様之儀、御国書生之議論世上え伝播仕候而は、御建白之御筋、成否へ相拘る而已なら

す却而御手煩之一事にも可相成も難計（中略）念之上に念を可入御時節に付而は、同様之書生輩は、京摂辺には一刻も不被差置方可宜（中略）早々御国被差下候而可然候<sup>(6)</sup>：」

幕府の嫌疑を恐れ、彼らを国許に召還しその意見を封じ込めようとするものだが、それに対し、彼らの意見を取り入れていこうとする「手子衆」の存在もみられるのである。江戸手元役であった周布政之助は、久坂らのような「気節之士」は「朱学先生方の曲学私論」よりは優れた「国家有時而は」用をなすので、全面的に押えつけるよりむしろ「存意之旨、書取を以申出候は、達君聴候様、取計」、彼らのエネルギーを藩内に育成して置くことが藩の将来の為に必要だと述べている<sup>(7)</sup>。又江戸祐筆中村九郎兵衛も「御為筋と存詰申出候儀、御取捨不被仰付候而は、思召筋にも相叶間敷」「殿様御前被召出、見込之次第御直に被聞召候は、於彼等も遺憾有之間敷に付、其御取計相成候様にと存候、左候は、御大事业万一之御裨益にも可相成哉<sup>(8)</sup>」と述べている。彼らを押えつけようとする保守的勢力の一方で、彼らの意見に理解を示す「手子衆」もいたことがわかる。又久坂の書翰や日記によれば、穴戸九郎兵衛・前田孫右衛門<sup>(9)</sup>・北條瀬兵衛

・土屋矢之助・来原良蔵といった人々も彼らと交流し議論しており、文久二年(一八六二)四月二十一日付白石正一郎宛土屋矢之助書翰には「穴戸九郎兵衛竹内正兵衛二人は至て腹もつよく候故毛頭疑念は無之大丈夫に御座候(中略)前田は何分人才にて満城の人氣も感服正論侃々弊藩第一と申ても可然哉此人在役故大抵俗論ハ取おさへ候<sup>(11)</sup>」と書かれている。

又そのような「手子衆」の存在は、次の兵庫備場への出張をめぐる問題でも認められる。結局久坂らは文久元年中に召還される形で萩に戻ってしまったのだが、文久二年(一八六二)になると再び政治の中心地へ赴く為に、兵庫備場の警衛人数に加えてくれるよう運動している。その際例えば二月二十三日付久保清太郎宛久坂書翰には、前田孫右衛門や北條瀬兵衛に説いたことが述べられており、日記にも「北條(日)近日より東行の議に相決候有志人なと兵庫へ少々差出す心配可致との事に有之<sup>(12)</sup>」とある。又三月二十日付久保清太郎・中谷正亮・梶崎弥八郎・佐世八十郎・久坂玄瑞連名の趣意書には「右五人連名にして前田孫右衛門まで出す同人より福原越州に呈せし由此は前田より東行せんとの趣意を認めよとの事なれば也<sup>(13)</sup>」との覚書が付いている。これらのことか

ら、彼らの備場出張願に対して、北條や前田らが尽力したことが知れる。そしてその結果として、この時の警衛人数には数多くの「尊攘志士」達が含まれた。この兵庫行は、京都と兵庫との地理的歴史的関係を考えれば重要な意味を持つ。事実、兵庫行の命は三月二十四日に下ったが、彼らは四月十一日には既に京都に入り、十九日付で長井弾劾の建白書を提出している<sup>(14)</sup>。つまり国許に引き戻されていた彼らが、ここで再び政治の中心地に、脱藩、という形を取ることもなく赴くことができた訳である。しかもこの時の統率者は側近に赤松武人・秋良敦之助・白井小輔といった人物を持ち、その日記から久坂ら「尊攘志士」達との交流が伺われる浦鞆負であった。そしてその浦は、京都において諸事を差図する権限を得たのである<sup>(15)</sup>。北條や前田らの尽力が意味したものは大きい。

以上「尊攘志士」達と「手子衆」との関係をみてきたが、文久期に至るまでの政治過程の中で、既に「手子衆」として政治的地位を得ていた人々の中に、「尊攘志士」達の意見に理解を示し、ある点では賛同して、その意見を取り入れていこうとする人々が存在し、「尊攘志士」達は彼らの力添を受けて、序々に力を得ていったことがわかる。

(以下本稿ではこうした「手子衆」を仮に「尊攘派手子衆」と呼び、論を進めていきたいと思う。)

## (2) 「尊攘派手子衆」の志向

では何故彼らは「尊攘志士」達の意見を取り入れていくとしたのだろうか。この問題について、以下の論では納得は得られないかもしれないが、その一端を明らかにすることはできるであろう。

周布政之助の文久元年(一八六一)と二年にかけての書翰をみると、彼が産物交易に対し強い関心を持っていたことがわかる。そこで同時期に藩の産物方御用掛に就任した者を拾いあげてみると表2のようになる。「尊攘派手子衆」とされる人物が多いことに気付く。そこで産物方について少し検討してみたい。

産物方は、安政五年(一八五八)十月物産の開發を目的とし、産物取立・交易の機関として設けられたが、その集荷方針及び売捌方針をめぐっては次のようなことが指摘できる。

先ず集荷方針について、結論から先に述べるならば、介在する商人を排除し、自らが独占的に諸品を取扱うことをめざしていたといえる。それは例えば次のような事例にみることができる。

### 長州藩尊攘派の形成及び抬頭に関する一考察

表2 文久元年～2年産物方御用掛就任者

年 月 日	氏 名	備 考
文久元年7月29日	内 藤 兵 衛	同年9月9日免
〃	●北條 瀬兵衛	
〃	●竹内 正兵衛	
7月30日	小川市右衛門	
9月7日	●前田孫右衛門	
〃	柿 並 市 太	
10月13日	●宍戸九郎兵衛	「産物方頭人」
文久2年4月5日	●来島 又兵衛	

山口県文書館蔵「産物事」より作成

※1. ●は「尊攘派手子衆」

安政六年(一八五九)二月長州苅屋の興膳昌蔵が、五百万斤の石炭を製鉄所と直接取引しようとする、産物方は早速「石炭産物方一手にして会所え納方仕他売之儀嚴重差止候段当正月産物方御用掛諸藤久兵衛願出二月四日会所願之通可被仰付との儀御聞濟」、興膳が取引することになったのは「甚以不都合之儀如何ニ茂御国之詮議不締之様相見御外聞ニ茂相拘候付国元石炭之儀ハ一手

上納之儀会所へ願濟候儀ニ付御用達連名仕居候而ハ差障り候」(山口県文書館蔵「産物事」)と主張し、興膳の取引を排除している。又大坂商人河内屋庄右衛門が同年四月長州藩内で干瀬貝を買集めようとしたことに対しては、「於御国産方取上相成長崎被差廻彼地御用達諸藤久兵衛一手にて相納俵物方御役所買上相成来候」(前掲「産物事」)と主張、やはり河内屋の介入を排除している。このような方針は、木綿取引において顕著にみられるが、それについては既に北川健・井上勝生両氏により詳細に報告されているので、ここでは割愛する。

売捌方針に関しては、より大きな利潤を求める為に、従来の流通ルートからはずれて、価格操作を主導的に行い得るような新しいルートの開拓をめざしていたことが指摘できる。

前掲「産物事」によれば、安政五年(一八五八)九月十三日には京都町奉行与力山本善太夫が、万延元年(一八六〇)二月六日には堺町奉行与力戸田信橋が、同四月十日には大坂商人島内蔵之進がそれぞれ「津越一件」の功勞により御館入や御目見を許されている。「津越一件」の内容は御国産塩の津越とあり、例えば山本の場合は、津越を「万端引受ニノ取捌」いた先例があり、今回の津

越が調べば「京都近江其外運送勝手に相成儀に御座候」と書かれている。又文久元年(一八六一)七月十一日付周布の書翰には「兵庫に而は、加納治兵衛先便申進候通、御国産物御世話仕度由、追々内願之趣も有之、旁御所帯方産物方等、被仰合候而、兵庫京都直段御掛競らへ、京都え登候而も、引合候儀に候は、兵庫より尼崎通り、京都え津越之道をも、相開き置候而可然」とあり、京都町奉行与力の加納には既に米に関しての津越の「心配仕呉、甚都合克相調」<sup>(18)</sup>えてくれた前例のあることも書かれている。これらの事例から、産物方が大坂を回避する津越ルートの開拓に力を注いでいたことが知れよう。そしてその結果「両三年此方追々端浦陸揚盛ニ相成大阪入津荷物相減し候趣同断商人共歎願申立」(前掲「産物事」文久元年正月十五日達)云々という状況を招いていた。産物方が価格操作において、大坂商人より優位な立場にたち、自らの主導権の元に売捌を行い得る体制をめざして、新しい流通ルートの開拓に尽力していたことがわかる。

江戸問屋に関しても、次の周布政之助の書翰等に同様の志向がみられる。貞永庄右衛門の所有する浦賀船問屋株を藩が取揚ることについて、「浦賀は江戸之咽喉に付、

船問屋之株此方に持居候而、市兵衛世話仕せ候得は、江戸廻し之御国産之捌方、無此上便利にも可有之」「江戸廻し産物、直に江戸え持込候而は、御府内問屋共之術中に陥り候付、一先浦賀に留置、諸方之直段を聞繕、随意に運転仕候得は、御利益不大形儀に可有之」<sup>(19)</sup>と述べている。浦賀を利用することによって、江戸問屋の「術中に陥」らず自らが主導的立場で取引することを望み、浦賀利用の新しいルートの作成をめざしていたのである。

そしてこのような産物方の方針は、次のような理由から「尊攘派手子衆」を生む要因を作ったと考えられるのである。

即ち、長州藩の航海遠略策周旋に対し、老中久世広周・安藤信正は「奥右筆組頭早川庄次郎の仲介と、大目付駒井朝温・目付浅野氏祐の助言を得て」<sup>(20)</sup>これを受入れたのであった。駒井朝温は安政以来北国海岸巡見や諸外国使節の応待など外国関係の任務を務めており、万延元年（一八六〇）四月二十八日の国益主法掛設置と共にその職に任ぜられている。浅野氏祐もやはり外国掛系の目付で、同年十二月十五日に国益主法掛を命ぜられた。幕府内には流通統制政策をめぐる二つの意見があったが、外国掛大小目付は産物会所構想の元に「全国的な商品流

通の新たな統制」<sup>(21)</sup>をめざし、それに勘定掛系の役人達が反対していた。そしてこの国益主法掛の設置によって、前者が有力になった。即ち、外国掛目付系役人の主張する幕府の手による全国的な流通統制政策が幕府の方針となったのである。その外国掛目付で国益主法掛であった二人が尽力したということは、航海遠略策がその路線上に展開していかざるを得ない状況を示しているといえよう。この幕府の方針と、先にみた産物方の志向——特に売捌方針——とは明らかに抵触する。共存できない。とするならば、産物方は幕府に対し批判的になり、ある種の対抗意識を持たざるを得ないのである。産物方関係者は、航海遠略策が幕府の方針に沿う御用政策として取り入れられていくならば、それに反対し、対抗措置を取らざるを得ない。それは航海遠略策の放棄であり、反対方向への藩是転換に他ならないだろう。

以上の考察からⅠの結論として、政治的主体としての長州藩尊攘派は、「手子衆」の中でその政治的立場を通じて、幕府に対する批判的な目とある種の対抗意識とを持たざるを得なかった「尊攘派手子衆」が、松下村塾出身者を中心とする「尊攘志士」達の意見を取り入れ、彼らと結びついていくことによって形成されたと考えられ



るのである。

(補論)

では航海遠略策推進派についてはどのようなことができるか、残念ながらそれは今後の課題だが、産物方が関係している次の件について少し触れておきたい。

文久元年(一八六一)八月十五日付周布政之助書翰には、利潤の追究と取引円滑化の為に、それまで複数の機関の指揮下におかれていた藩の産物交易事務を一元化する構想がみられる。

「一、江戸廻し御国産物捌方之儀、肉九(〓穴戸九郎兵衛)存付之趣、委曲承置候処、私存意に而は、産物方一手にして根本を管轄仕置候様仕度(中略)是迄御所帯方に而取扱候分も、向後は産物方合一に仕候様、地方被仰合可被下候、左候而江戸廻り之物々は、江戸方に而当季々々其世話可仕、差直段申来候得は、御利益之有無は分明に付、私式に而も、損は不仕候<sup>(22)</sup>」

しかし、この意見に対して藩内の「耳目輩」が反対し、「愚耳目輩之説深入仕候而、万里翁不同意に候は、先物産局は只今之通に而被差置、私を追下し被仰付候様にと奉願候、私も全体長雅万翁なと之見込に而は、疎暴ものに落ち付られ候故、建白仕候廉々も、難被相行次第に可

有之候<sup>(24)</sup>」という状況が起こった。「耳目輩」とは「耳目監」「耳目中」という言葉もみられ、恐らく目付・監察系の役人のことかと思われるが、長井・内藤側の彼らは産物交易に関し、利潤追求よりも体制維持を主張していたのである<sup>(25)</sup>。

## II 尊攘派の政治権力について

### (1) 尊攘派と世子定広の存在

では次にその尊攘派が、いかにして政治的力を獲得し、反対派を押えて権力を強化したかについて考えてみたい。

先ず藩是転換を決定した御前会議については前述のように『長井雅楽詳伝』によるしかないが、それによれば尊攘路線への転換賛成者は「公上京以前既に京都に滞在したる人々」であり、反対者は「江戸より来りたる人々<sup>(26)</sup>」であった。これは、藩主より先二ヶ月程早く世子が上京していることから、前者は世子とその随行の「当役衆」「手子衆」をさし、後者は藩主と同様の「当役衆」「手子衆」をさすと考えられるのではないだろうか。藩是転換後の尊攘派の行動をみると、世子の存在が大きく思われる。例えば、破約攘夷の貫徹等をめぐる越前藩・対馬

藩・土佐藩といった各藩との外交は世子が表にたって行われており、特に対馬藩では、保守派家老佐須伊織の暗殺によって尊攘派が主導権を握った直後であったが、世子はその実行者達と交わっていて、彼らが押す宗善之允の「御殿中御引廻は素より、御公私内外御心添<sup>(27)</sup>」さえも請け負っている。又「尊攘志士」達との交流についても、文久三年（一八六三）正月二十七日京都翠紅館での肥後・土佐・津和野・対馬・水戸・長州各藩志士達の会合に、破格の存在である世子定広が出席しているのを顕著な例に、例えば攘夷期限の布告によって長州入を望む他藩出身の「尊攘志士」<sup>(28)</sup>達が多くなると、彼らに世子の名によって許可を与えたりしている。御前会議での対立を、世子随行者と藩主随行者の対立であったと考えることは妥当であろう。

では、藩是転換前後の世子をめぐる状況を考えてみよう。文久二年（一八六二）四月晦日、世子は帰国の途中国都において朝廷より公武間周旋の内旨を受ける。この時世子に従っていたのは、その「御前」における会議の出席者から表3のような人々であったことがわかる。北條・宍戸・竹内・中村といった「尊攘派手子衆」、そして先に触れた浦靱負の存在が認められる。

長州藩尊攘派の形成及び抬頭に関する一考察

表3 世子による御前会議出席者

		4/28	29	30	5/7	6/7
↑ 当役衆 クラス ↓	●浦靱負	○	○	○	(○)	○
	●清水美作	○	○	○	(○)	○
↑ 手子衆 クラス ↓	井上小豊後	○	○	○	(○)	○
	●北條瀨兵衛	○	○	○	○	○
	●宍戸九郎兵衛	○	○	○	○	
	●山縣吉之助	○	○	○	○	
	●田北太中衛介	○	○	○		
	●竹内正兵衛	○	○	○	○	
	●山田亦	○	○	○		
	●来原良蔵	○	○	○	○	○
	●内藤次郎兵衛	○	○	○	○	○
	●桂与一右衛門	○	○	○	○	○
	●来島又兵衛	○	○	○	○	○
	●中村九郎兵衛	○	○	○	○	○

「浦日記」より作成

- ※1. ●は「尊攘派手子衆」（但、浦は「当役衆」）  
 ※2. 井上小豊後は、江戸との連絡係をつとめている。

この時世子に下った内旨について、江戸にいる藩主の意向は、周旋の辞退及び帰国であった。「於各所御兩殿様御周旋被遊候ては、万一御齟齬之儀共有之候ては不被為相済」から「御断被遊候外有之間敷」、<sup>(29)</sup>国許のことも考えれば帰国すべきと言ってきたのである。しかしそれに対して、世子による御前会議での人々の意見は、内旨は厚き叡慮であり「殿様兼而之思召も勤王第一之儀に付」<sup>(30)</sup>「御請被仰上外無之」というものであった。その席上世子は「殿様思召も有之候を、其儘にて差置候は、何共奉恐入候に付、何卒今一応小豊後なり共申入候而は如何候哉」との意見であったが、出席者達は「爰元之御様子<sup>(31)</sup>は、江戸にては相聞不申、御情愛之処にて、被仰出候儀にて候得共、爰元厚き 叡慮之次第にては、中々御断不相成候に付、殿様には御入割之儀は如何様共御詫可有之、何卒 天朝え思召に被為任可然<sup>(32)</sup>」と述べ、あくまで内旨受諾を主張、結局滞京周旋に決定し、実行してしまっている。そしてこのことで彼らは別に咎めを受けてはいない。これは、世子に従っている「当役衆」「手子衆」が、切迫した政治情勢を背景にしてではあるが、藩主及びその元に在る「当役衆」「手子衆」から離れ、彼らの意向とは別の異なった政治上の判断を下し、それを実行

し得た事実を示している。

同様の事実は、勅諭改ざん問題においてもみることができる。文久二年(一八六二)八月、世子定広は勅諭を幕府に奉ずる為江戸に赴くが、その勅諭中に、冤罪赦免せしむべき殉難者として寺田屋事件の関係者が含まれていたことから、薩摩藩がこれを遺憾とし、江戸に滞在中の勅使大原重徳に対して、「近くは伏見一挙等に而致死失候者共」という十六文字の勅諭からの削除を求めた。その結果、大原勅使は世子に、十六文字を削除して奉ずることを要求したのである。これに対し世子とその随行者達は、初めは藩主(在京)承知の上でなければ不都合とし難色を示したが、十九日の世子による御前会議では次のような方針を決定している。

「…若も 此御方より 勅諭御差出無之内、右之内一事に而も、於幕府被相行候様之儀共有之候而は、折角御尽力御奉行之御詮薄く相成、御都合いかゝ敷可相成哉(中略)殿様へ 御沙汰少々御遅延に相成候共、御次第之儀は、屹度相立候様、勅使より御請合被成候上は、速に御請御奉行被成候而も、可然<sup>(32)</sup>」

そして、江戸だけの判断において削除・奉勅を実行してしまった。この削除に関し、京都の藩主・「当役衆」

「手子衆」の意見は反対であった。二十六日にも藩主による御前会議の結果として、議奏野宮定功に反対の意を上奏している。<sup>(33)</sup>ところが江戸では削除・奉勅を実行してしまった。二十七日報告を受けた京都では、それが御前会議の結果であったにもかかわらず、野宮定功に対して「昨日政之助より申上候儀は、御聞捨被下候」と、前言を撤回せねばならなかったのである。

このようにして、世子に随行していた「当役衆」「手子衆」は、藩主及び藩主と共にある「当役衆」「手子衆」から離れて、政治的な問題に対し独自に判断し対処するという既成事実を作り出してしまった。本来藩主のみが持っていたはずのこのような政治的力を、切迫した政治情勢を背景に、世子が単独で行使し得るような状況を作り出したのである。

そして、そのようにして得た世子の政治的力が尊攘行動に利用されていくのである。先に述べた他藩との外交や「尊攘志士」達との交流の他にも、例えば文久三年（一八六三）四月国事御用掛から攘夷・海防・国是に關する諮問があると、世子による御前会議に氣附書を持ち寄り、そこで意見がまとめられ提出されている。<sup>(35)</sup>三月二十二日関白鷹司家・中川宮・三條家（いずれも国事御用

掛）・姉小路家（国事参政）及び学習院に提出された「撰海戦守御備」に至っては、浦靱負・清水美作・周布政之助・来島又兵衛・桂小五郎ら十三名によって「兼而は儲公え御伺候上にて、順路に御申立相成候様可仕含居候処、意外之儀（『將軍家茂の二十一日京都出立の発表』）出来候付、俄急に申出候付、御伺之間合無之候故、同志中之献言に仕候（中略）右廉書及御聞候様可仕」と世子の不在中に、許可なく追認を求める形でさえ提出されているのである。<sup>(37)</sup>

## (2) 尊攘派の藩制改革

では次に、尊攘派がとった政治体制について考察してみよう。

先ず第一に注目すべきは政治機構の一元化である。文久三年（一八六三）二月の藩制改革については既に多くが論じられているが、これはその前年十二月七日に行われた京都藩邸の職制改革と合わせてとらえれば、その意図がより明確になる。京都の職制改革は江戸（主に行相府）と京都の一体化をはかる次のようなものであった。

一、京都留守居の制を改め江戸邸と交替互住せしめ又学習院御用掛を兼ねしめ従前より管し来れる金穀の使用

は別に矢倉頭人を置いて之を所轄せしむ

一、京邸の矢倉頭人は国相府の蔵元兩人行相府の用所役をして兼任せしめ又学習院御用掛を兼任し留守居の事務にも与らしむ

一、京邸の検使を罷め行相府の大検使より兼ねしめ従前の慣例を以て堂上諸官及び其他の応対のことを兼ねしむ。

一、京邸の役員は国相府の選任を改め以往は行相府の選挙となす。<sup>(38)</sup>

そしてその上で、文久三年（一八六三）二月十一日の国相府・行相府の区別を廃止し一元化する改革が行われたのである。即ち、先ず政治の中心地である京都と江戸の二つの出先機関（京都藩邸と行相府）の体制を一本化し、次に行相府と国相府を一体化するという二段階をとって、藩政機構を集約し一元的な政治体制の構築をめざしたのであった。<sup>(39)</sup>そして「手子衆」の中で最も要職となつた用談役には穴戸九郎兵衛が、「用務取計」には北條瀬兵衛（蔵元役兼任）・山田宇右衛門（政務座兼任、但「尊攘派手子衆」とは考えられない）が就任したのである。次に、藩政庁の山口移転があげられる。<sup>(40)</sup>城下町萩は、当然のことながら保守傾向が強く、藩是転換に際して

も、その報が伝わるといわゆる「俗論派の沸騰」が起り、伝達役毛利伊勢自身が「俗論に被致雷同却而俗論を生」じてしまふような状況で「俗論之巢窟」であつた。<sup>(41)</sup>そこで政事堂を地理的条件もよい山口へ移し、「俗論派」から隔離してしまうことで体制の安康化をはかった。八・一八政変後苦境にたつた尊攘派が、山口を孤立させてのり切ろうとしていることからも、山口移転の意味は伺われよう。<sup>(42)</sup>

又文久三年（一八六三）六月から七月にかけては、郡奉行・町奉行に対し他国人の領内通行を規制する達を出している。これは萩・山口入を禁止し、例え他藩からの使者であっても通行を大きく制限するもので、六月十三日の達によれば「他国人入込候は、御国法之旨申聞、早速退去仕らせ、若胡乱之者に候は、召捕候而其趣申出候様被仰付候事、但、胡乱之者召捕掛候節、手向ひ候は、切捨候而も不苦候事」という厳しいものであつた。しかし、達の翌十四日及び十五日に吉村寅太郎・池尻獄五郎・松本謙三郎・池内蔵太から山口への通行願が出ると、山田亦介・周布政之助・穴戸九郎兵衛らは「山口表之要用有之（中略）土屋矢之助致相对、其旨趣分明に付」通行させよと郡奉行へ申達している。<sup>(43)</sup>この四名は

いずれも他国出身の「尊攘志士」達であり、土屋矢之助も尊攘派であった。つまりこの規制は、文面通り他国人の出入りを禁止するというよりは、むしろ尊攘派がその選択権を握ることを目的としたもので、体制確立の為に他国からの情報を有利な方向に規制しようとしたものであると考えられよう。

### III 結論

文久期以後長州藩に藩政の政治的主体として登場した尊攘派は、その政治的立場を通して、幕府に対する批判的な目とある種の対抗意識とを持たざるを得なかった。尊攘派手子衆<sup>45</sup>が、松下村塾出身者を中心とする藩内の「尊攘志士」達と結び着くことによって形成された。そして「尊攘派手子衆」は、本来公的な政治力を持たないはずの世子が、独自に政治的行動を取り得る既成事実を作り出し、その結果得た世子の力を利用して、尊王攘夷の為の行動を行った。更に尊攘派は、政治機構を集約・一元化してその集中された権限を掌握し、藩政庁を城下町から隔離、又情報規制を行って体制の確立を計ったといえる。

その際、先ず世子の得た政治的力について考えてみれ

ば、それは本来幕藩領主権力であるが、藩主及びその元にある「当役衆」「手子衆」から離れて行使されている点で、幕藩体制から逸脱しているといえ、更に集権体制及び城下町からの隔離・情報規制などの上にその力は再編された訳であるから、この権力は幕藩領主権力の範疇を超えた権力であったといえよう。又産物方の志向をも考え合わせれば政治的主体としての尊攘派は、前記の意味で幕藩領主権力を超えたより絶対的な権力に依拠するものであったといえるのである。

本稿は、服部之総氏が「志士と経済」の中で、久坂玄瑞らが脱藩の要もなく藩論を握ることについて、「近代的政策力をもつ建設派新官僚の支持」よりむしろ決定的なのは「全国『草莽義徒』<sup>(45)</sup>の組織された圧力を代表することができたから」と述べているのに対し、ある意味で合法的に抬頭してきた長州藩尊攘派を考える上では、やはり「建設派新官僚」に着目すべきではないか。昭和初期に野呂栄太郎氏が「明治維新が、反動的なる公家と、同様に本質的には封建意識を脱却し得ない武家との意識的協力によって遂行せられたということとは、(中略)我が政治的組織が永く今日に至るまで反動的専制的絶対的

性質を揚棄し得ないゆえんである。<sup>(46)</sup>」と歎かねばならぬのは、この官僚層の存在が関わっているのではないかと考えたことに端を発し、近年の井上勝生氏の研究成果に啓発されながら河北展生教授の御指導によりこのような形で論文にまとめることができた。今後は禁門の変による「尊攘派手子衆」の喪失によって、尊攘派として存在していた政治的主体がどのような変化を余儀なくされるのかを課題として考察していきたいと思っている。

# 註

(1) 弘化年間以降家老職を務めた浦鞆負の日記(山口県文書館蔵、以下「浦日記」)をみると、世子のみの臨席による会議の場合でも「御前会議」という表現が使われている。その為本稿では「藩主による御前会議」「世子による御前会議」と区別し、両者の臨席による場合は単に「御前会議」と表現する。

(2) 「手子」という言葉は、「加勢をする、手伝う」という意味で、長州藩では広く一般的に使われる言葉(石川卓美編『山口県近世史研究要覧』(一九七六年)、マツノ書店)であるが、井上勝生氏は「幕末における御前会議と『有司』——日本絶対主義形成の特質について——」(『史林』六六巻五号(一九八四年))の中で前掲「浦日

記」の用例から、「手子衆」は「手元役、右筆に用所役、蔵元両人役、遠近方らの実務の役人を加えたグループ」(七頁)をさし、「もともと当職、当役の付属役人(「属吏」)であり、『何かしの御手元』と呼ばれ、当職、当役の実務を担当し、そのブレーンを構成しておいたのであって、近世後期の藩政の実権は、当職、当役から彼らに移っていた」(三三頁)としている。本稿でも、「手子衆」を「当役衆」(＝当職、当役、加判役といった家老クラス。例えば浦鞆負は、前当職という形で文久期の政局に登場するが、後には「江戸当役同様御用取計被仰付」る。〔山口県文書館蔵「内藤万里助後酒造公私日乗」——以下「内藤日記」——文久二年七月四日条〕。この浦のような人物も「当役衆」として把握する)の元で、実務を担当する手元役・用所役・祐筆などの人々としてとらえる。(例えば「当役衆」間の書翰をみれば「猶御手子衆え、弾正手手衆より委曲申越候付、御承知候而、無抜目様可被成御配意候」というような形で結ばれていることが多い。書翰の引用は、周布公平監修『周布政之助伝』(一九七七年、東京大学出版会)——以下「周布伝」——下巻二〇七頁)

(3) 中原邦平編、一九〇三年頃。本稿には一九七九年発行マツノ書店版を用いた。この時の会議の内容について「今会議の模様を聞くに、大略左の如くなりしと云ふ」(一九六頁)として転換賛成の甲者と反対の乙者との会

話形式で記述されている。

- (4) 前出井上論文、一九頁
  - (5) 長井の着府報告書。前掲『長井雅楽詳伝』八四～八五頁
  - (6) 前掲『周布伝』上巻七四九～七五〇頁
  - (7) 文久元年九月五日付藩主随行要路宛書翰。同右上巻七三四頁
  - (8) 文久二年五月周布政之助・井上小豊後宛書翰。同右下巻九一頁及び前掲『長井雅楽詳伝』一八三頁
  - (9) 前田は藩是転換の御前会議には参加していないが、安政の改革綱領作成にも参加し、文久期も直目付や用談役を務めている。
  - (10) 福本義亮著『松下村塾之偉人久坂玄瑞』(一九三四年、誠文堂)——以下『久坂玄瑞』——
  - (11) 野口勝一・富岡政信編「維新史料」、野史台、書翰(一)——
  - (12) 書翰は前掲『久坂玄瑞』五〇五頁、日記は「江月斎日乗」同前二九五頁
  - (13) 同右四七一頁
  - (14) 同右五〇七～五〇八頁
  - (15) 前掲「内藤日記」文久二年五月七日及び七月四日条
- 一、鞆負殿京都滞留中諸事御用駈引被仰付候段御書を以て申来
- 御用中孰も鞆負殿之差図を受候様申来候

長州藩尊攘派の形成及び抬頭に関する一考察

一、鞆負殿事江戸当役同様御用取計被仰付候：

- (16) 『防長回天史』第二編三六九頁
  - (17) 北川健「万延元年周防大島の「悪魔退散一揆」(『山口県文書館紀要』四号、一九七五年)井上勝生「尊王攘夷運動と公武合体運動」『講座日本近世史7開国』(一九八五年、有斐閣)——以下『開国』——
  - (18) 前掲『周布伝』上巻六八〇～六八一頁
  - (19) 兼重讓蔵・小川市右衛門・山田宇右衛門・中村九郎兵衛宛。同右上巻七〇〇～七〇一頁
  - (20) 三谷博「文久幕政改革の政治過程」『年報・近代日本研究』3幕末・維新の日本(一九八一年、山川出版社)一〇五頁、前掲「内藤日記」からもその経緯は伺われる。
  - (21) 守屋嘉美「阿部政権論」前掲『開国』一〇二頁
  - (22) (19)と同一書翰、六九九～七〇〇頁
  - (23) 直目付内藤万里助、長井の同僚で航海遠略策の支持者である。
  - (24) 文久元年八月十七日付萩藩政府宛周布政之助書翰。前掲『周布伝』上巻七〇八頁
  - (25) 結果は文久二年四月五日に一元化
  - (26) 前掲『長井雅楽詳伝』一九六～一九九頁
  - (27) 前掲『周布伝』下巻二七六～二七七頁
  - (28) 同右下巻四八七～四八八頁
- …肥後処土黒瀬一郎助 安田喜助 因州同武田真一郎



備前同岡元太郎 島原同尾崎濤五郎 梅村真一郎  
右、面々時山直八一同、赤間関出張仕度由に付、心  
願之通御聞届相成候間、此趣直八より沙汰仕候様被  
仰付候事

右之通致沙汰候條、被及御<sup>マ</sup>、聞候而、居所旁御沙汰可  
被成候様申進候様、

若殿様被仰付、如此御座候、以上

四月

浦鞆負印

福 越後様

(29) 前掲『長井雅楽詳伝』一五六～一五八頁

(30) 前掲『浦日記』文久二年六月七日条

(31) 「清水美作日記」同日条、前掲『周布伝』下卷一一三  
～一一四頁

(32) 文久二年八月二十日付兼重讓藏・桂小五郎・山田亦介  
等より周布政之助・山田宇右衛門・中村九郎兵衛宛書翰。  
同右下卷一八八～一八九頁

(33)・(34) 中村九郎兵衛手記。同右下卷二〇八頁

(35) 前掲「浦日記」文久三年四月十六日条

(36) 文久三年三月二十二日付周布政之助・桂小五郎・村田  
次郎三郎・寺島忠三郎より久坂玄瑞宛書翰。前掲『周布  
伝』下卷四〇七～四〇八頁

(37) 又次のような例もある。文久三年三月二十八日付来島  
又兵衛宛周布政之助書翰に「北瀬罷登候由、御借銀一件  
御互とは決而持論相違可致と相考申候」「非常之御時節

に、尋常一樣之議論多きには、実に込入申候」とあるこ  
とから、資金操をめぐって、周布や北瀬瀬兵衛らと他の  
役人との間に意見の相違のあったことがわかるが、その  
解決方法として周布は「儲公思召次第にて、久右衛門え  
御直に被仰聞置候方可然」と述べ、結局「儲公思召」を  
利用して七百貫目を借りてしまっている。(『防長回天  
史』第参編下五六八頁、書翰は前掲『周布伝』下卷四九  
一～四九二頁)

(38) 『防長回天史』第参編上三八九～三九〇頁

(39) この改革は、尊攘派がⅡで述べたやり方で力を得たこ  
とを考え合わせると興味深い。

(40) 『防長回天史』第参編下一八七頁

(41) 山口県文書館蔵「内証始末第壹編」

(42) 前掲「浦日記」文久三年九月十四日条

「萩居合之諸士中猥ニ山口表罷越候之由相聞候処峠越之  
儀は兼而御沙汰之趣も有之候事ニ付向後出立帰着とも夫  
々支配方え申出候様被仰付万一届捨又は届無にして罷越  
候者於有之は急度可被及御沙汰

右之通支配中え可被相触候事 九月」

(43) 文久三年六月十三日及び七月五日・同十三日の達(前  
掲『周布伝』下卷五三八～五四三頁)

(44) 前掲『周布伝』下卷五二二～五二四頁

(45) 『黒船前後・志士と経済他十六編』岩波文庫版一五六  
頁、初出は一九三四年。

(46) 『日本資本主義発達史(上)』岩波文庫版七四頁、初出  
は一九二七年。

長州藩尊攘派の形成及び抬頭に関する一考察